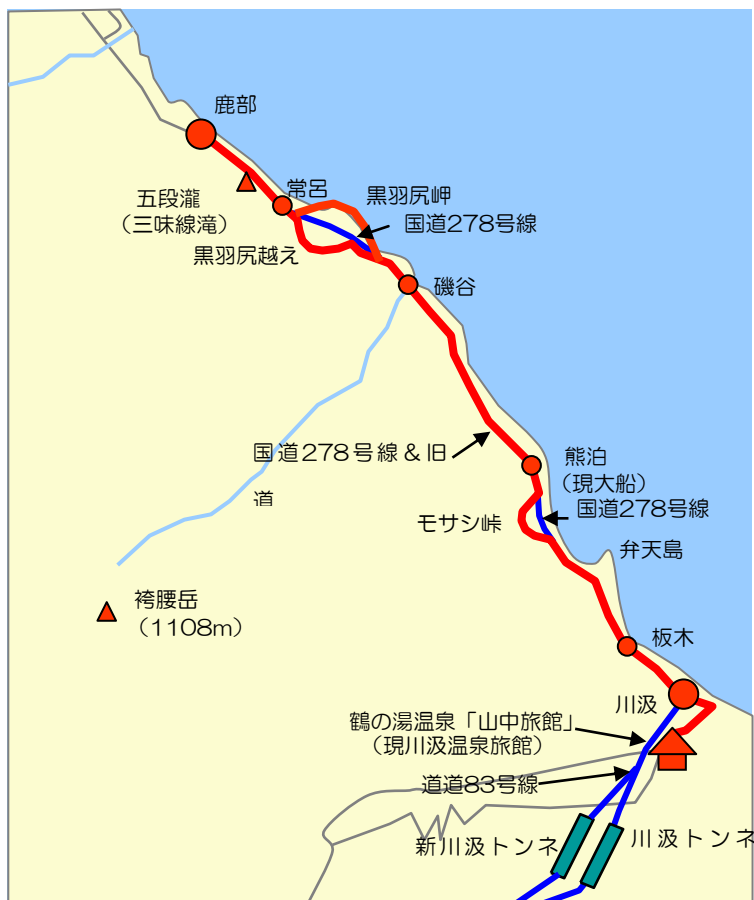
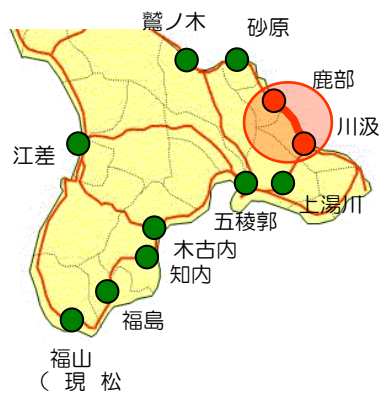


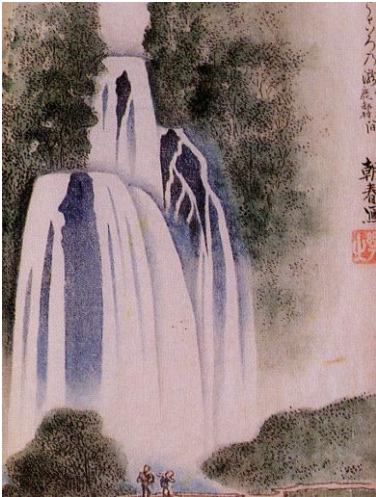
鹿部から川汲への道



鹿部～鶴の湯温泉「山中旅館」の道



明治初期の磯谷・川汲間の道路



五段瀧（松浦武四郎画）

鹿部からトコロ（（現常呂＝明治 15 年に常呂に変わった）までの道は、明治 19 年の「北海道巡回紀行」（青江秀）では「鹿部からトコロまでは全て海岸で砂礫あらざれば岩石突兀の間のみなり」とあり、当時は小砂利や岩の多い海岸を歩いている。

トコロの手前で五段瀧（現三味線の滝）が見える。

「弘化 2 年（1845 年）」の松浦武四郎の蝦夷日誌には「怪岩重疊として壁立数十丈是に瀑布あり。瀑布五段に見へ人の工を入れざる処にして」と書いている。

左の絵は「渡島日誌」に書かれているもので、絵の下側に旅人と道が描かれている。

さらに進みボーロ（望路）に着く。ここにある黒羽尻岬（別名ボーロ岬）は、大きな岩盤が道を塞いで行く手を阻んでいた。

そのため、ここを越える旅人などは、黒羽尻岬の岩盤を迂回して外側の海を歩いて渡るか、岩盤の上の峠を越えなくてはならなかった。

黒羽尻岬の海側を越えるのは、満潮時や風が強くて波の高い時は困難だった。土方隊の進攻は寒さの厳しい冬なので、冷たい海には入らず山越えをしたであろう。

明治 19 年「北海道巡回行紀行」によれば、「ボーロ岬は全て岩であった。隙間があり日光が透けて見えた岬辺りに小湾あり穴澗という。



黒羽尻岬の岩盤は切削された

ボーロ山麓の岬（黒羽尻岬）上を越える道路険峻なり、坂を下れば細流あり、黒羽尻川という。屈曲して海に注ぐ。この辺り熊が多く出る。更に一峻坂を上下し蹴勝浜出る。」と書いてある。

黒羽尻岬越えの道は、中の川から山側に道があったのだが、現在は山崩れ防止フェンスや防壁が出来て道は分からない。今でも僅かに残っているが、黒羽尻岬手前の民家の小路を通って行けば、右手の斜面に旧道が残っている。ここは旧道の雰囲気良く残している。

旧道を登って高台に出るが、この辺りは林道が沢山出来て、この先の

旧道は分からなくなった。

左側に行くと家が見える。地元の U さんの隠れ家である。この家の前に道がある。旧道では無いが、この道（私有地）を通して崖沿いの道を下れば、黒羽尻川に着く。ここの方が無難に歩ける。



黒羽尻岬越えの道



黒羽尻岬上の旧道



隊は黒羽尻を越えてケカツ浜に出た

星日記に書かれた、ケカツ（蹴勝）浜に抜ける道は、人が全く通らなくなったので、道が判別出来なくなってしまった。地元の人から聞いたところ、親の代には歩いていたと言う。

その場所は急な斜面で、今は草に覆われていて道は分からないが、草の下には道跡が残っている可能性もある。

黒羽尻岬からしばらく行くと豊崎トンネルが出てくるが、箱館戦争当時の道は、このトンネルの手前から斜面を登り、モサシ峠を越えているが、トンネル手前の山側は法の改良工事ですっかり地形が変わり、峠に登る道は確認できない。

土方隊はこのモサシ峠の手前の熊泊（現大船）で昼食を食べた後、船で物資を川汲に送っている。このモサシ峠越えを嫌ったのだろうか？

峠を越えたら、板木から川汲までは平坦地で、海岸に沿った小砂利道を進んだ。



黒羽尻越えの旧道



豊崎トンネルの上にモサシ峠旧道があった



南部藩蝦夷地経営図に書かれた黒羽尻岬越えの図



南部藩蝦夷地経営図に書かれたモサシ峠の図